幼児の教育　昭和62年7月1日発行（毎月1回1日発行）昭和23年4月15日第三種郵便物認可　第86巻　第7号

家庭・保育所・幼稚園

幼児の教育

1987 7

名古屋の水女子大学
昭和
63.2.15
受入
附属図書館

第86巻　第7号　日本幼稚園協会

豊富な事例、適切な助言、保育現場に役立つ実践指導書

障害児保育実践シリーズ 全6巻

大場幸夫・名倉啓太郎・村田保太郎・森上史朗　編著

障害をもつ子の保育に必要な配慮はなにか?

第1巻　自閉的な子どもと保育

第2巻　発達に遅れのある子ごもと保育

第3巻　ことば・聞こえ・見ることの障害と保育

第4巻　病虚弱・肢体不自由の子どもと保育

第5巻　心に問題をもつ子どもと保育

第6巻　障害児保育の基礎

本シリーズの特色

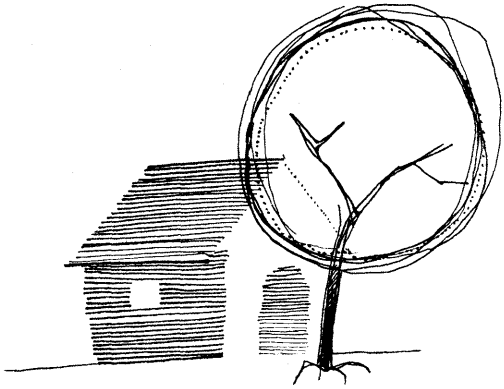
1. 障害児の発達の姿を共感的にとられて、園での保育のありようを考えます。
2. 実際例をたくさん出し合って、具体的に指導のあり方を考えていきます。
3. 障害児ひとりひとりの個性を大切にする保育、人間としての育ちを大切にする保育を追求します。
4. 実践者のナマの声を通して、保育に必要な点を探ります。
5. 豊富な事例、適切な助言、保育現場に生かされることを目的とした実践指導書です。

A5判・セットケース入り・各巻平均264頁・セット定価10,800円

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

幼児の教育



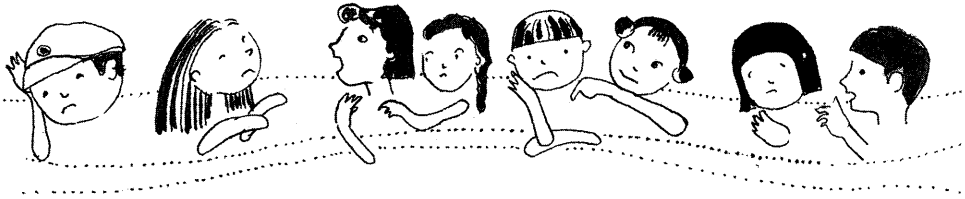
第八十六巻　　第七号

幼児の教育　目次

——第八十六巻　七月号——

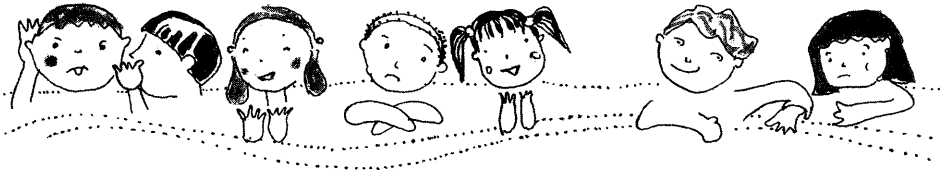
© 1987
日本幼稚園協会

イコンを求めて……牛島　義友…（4）
変化……津守　真…（8）
SF的読み解き　子どもという風景
第二十七回　時の流れ……堀内　守…（12）
回顧……川崎　千束…（22）
「光と影」……土橋　光子…（28）



ふくろうのつぶやき
——小さな場所に意味がある——……真壁　伍郎…（34）
おばあちゃんに出会う……上垣内伸子…（44）
ひとりで遊ぶとき、一緒に遊ぶとき……牛山佐智恵…（50）
若いお母さんたちへ
この頃……はるにれの会　向山　陽子…（55）

カット・福田　理恵
編集部・小澤　誉子
土屋真美子



イコンを求めて

牛島　義友

先年ロシアを旅行した時の最大の願いはイコンのふるさとを訪ねる事であった。

イコンはキリストや聖母マリアの姿や聖書の話を分り易く描いたものであり、その稚拙な表現の中にも必らず何かを強く語りかけるもので、児童画のすばらしさと相通ずるものがあるが、イコンには独創性よりも人物や説話には必らずシンボリカルな意味があり、はっきり何かを語りかける。幼なき日に日曜学校などで聞かされた教えが忠実に形象化されている。中世の人達の信仰心に強く引きつけられて来る。イタリーの古寺巡礼に於ても私にとっては古いフレスコ画やモザイク、特にラヴェンナやシシリー島のモンレアーレ教会のモザイク壁画には最も強く引かれた。

ルネッサンス以後の絵画もすばらしいが、ロマネスクやゴシックの絵画彫刻には素朴な信仰心が共鳴し合って去るにしのびない思いがあった。

これらの絵にはスペイン風のロマネスク、ビザンチン風のモザイクや彫刻に興味が向った。ロシアを旅する事によって、ビザンチンの源流にふれる期待で心が高鳴っていた。普通のソ連の観光旅行では出来ないが、その旅行では正教会との交流であったために、多くの教会、修道院を訪問する事が出来た。どこの教会でも立派なイコンが信徒と内陣とのその障壁に掲げられ、又聖母子像のためには特に蠟燭を棒げて礼拝するようになっていた。これらのイコンはすべて「聖」の世界を物語っている。たとえば教会にはそれぞれ名称がある訳であるが、それは文字で書かれておらず、教会の正門の扉の上に掲げられているイコンを見れば分るようになっている。たとえば大天使ミカエルの像があれば「ミカエル教会」であり、マリアの像なら「マリア教会」であるが、聖マリアが両手を上に挙げ、又は下に下げている場合は「お守りのマリア様」の意味である。すなわち昇天後のマリアを意味する。日本で云えば聖三一教会と云う場合にはアブラハムがもてなしている三人の天使の姿が描かれている。これのもっともすぐれたものはモスクワ・トレチャコフ国立美術館に移されているが（アンドレイ・ルブリョフ描く）この三人の姿が三位一体を現わす。ヨーロッパの教会で三位一体を現わす時は、父（神）と子（キリスト）と聖霊（鳩）を上下に配する画が普通であるが、ここでは三人の天使でそれを現わす。旧約聖書の中でアブラハムを訪ねた旅人を「天の使い」とは書かず、「神の人」と書いてあり、この三人が父と

子と聖霊を現わしている。

また主日には教会暦を通じて色々の日が定められているが、私達が訪れた教会では、三位一体主日に当っていたので、司祭達が礼拝する所に小さなこの三位一体の像が草花でふちどりして特別に安置されていた。洗礼者・ヨハネを現わす時には大きな皿の上に人の首だけが描かれておりぞっとした。これは皆イコンの約束事のようである。また内陣との境のイコン壁には扉があるが、これはどこでも皆ミカエルの像であり、彼の剣によって守護されている事を示す。

マリアの十字架の像の彫刻も多いが、しばしば胸から血がほとばしり出ており、足下には必らずされこうべが置かれている。これはキリストが十字架にかけられたのは、ゴルゴタの丘（されこうべの丘）であるからで、又それだけでなく人類の祖であるアダムを象徴している。すなわちアダムの犯した誤ち、人類の原罪はキリストの血により贖なわれたことを物語っている。ローマ教会などで見慣れた十字架上のキリストの像とは異なる。

このキリストはまた苦しみの像と云うより正面を向き眼を大きく開いた栄光のキリストもあるし、また十字架につけられた捨て札はヨーロッパではピラトがユダヤ人の不当な要求に反撥して「ナザレのイエス・ユダヤ人の王」（Jesus Nazarenus Rex Iudaeorm）と書かせ、略してINRIが普通であり、この形式はきまりかと思っていたが、ロシアでは三番目のRがBであったり、ロシア語のツァーであった。これはRはラテン語であるが、Bはギリシャ語のバリスター、ツァーはロシア語の「王」を意味する由で、考えてみればこ

の文字が原型に近いのかもしれない。

このようなさまざまの宗教的教えがイコンを見ることによって教えられた。

すなわち絵画と文字とが完全に融合し、文盲の人の多かった中世には便法であったし、今日の映像の時代から見直せば新しい行き方を教えているかもしれない。

また教会の礼拝は、肉声によるすぐれた和音音楽であるので、音楽を聞きながらテレビを見る今日の生活を先取りしていた、とも云えようか。

私が特に親しみを持つのは十五・六世紀の家庭祭壇用の小形のイコンであるが、これらは古美術品として扱われており、教会の中でも数多く見ることは出来なかった。セルギュウス師の始めたザボルスク大修道院にはこのような古いイコンの蒐集があったが、写真も撮らせてくれなかった。実際に教会の中にあるものはもっと大形で新しい物であり、もっぱら礼拝用に安置されておる。銀細工によりふち取りされたマリア像も多いが、これには余り感心しなかった。新しいものは写実的に、而も美しく描かれており、引き伸ばされた色彩写真のような感じのするもので、美しくはあるが、宗教心をかきたてるものとは云えない。正直に云うとこの傾向を見て失望し、中世への回帰がますます強められた。

児童画が幼児期に於ては魅力的であるが、小学上級生になるほどつまらなくなって来るのと似ている感じがした。

変化

津守　真

四月のはじめ、新学期になって二日目、朝いちばんにいつも登校するKが庭の水たまりで遊ぶのに私はつき合っていた。いつもだとひとりで泥をシャベルですくったり、木の葉を散らしたりして遊ぶことが多いのだが、この日は私の手をぐいぐいと力強く引張った。私が一緒に泥水に手をいれると、私の顔を見上げてにっこり笑う。私がKから目をはなして別の方を見ていると、後から私の手を引いて相手をするように催促するので、私はKと遊びつづけることになった。これは休の間の子どもの成長である。

次々に子どもたちが門から入ってくる。新学期になって久しぶりの学校に、子どもたちに戸惑いがあるのではないかとの緊張感が私の側にあって、別の子どもが来るたびに私は立ち上って迎えた。ある子どもはちらと私の

顔を見て傍を通りすぎ、ある子どもはしばらく私とやりとりをしてからそれぞれの新しいクラスの部屋へと向っていった。

聞きなれない泣き声がするのでふり向くと、水たまりで泥水の遊びをしているKである。私が近寄ると、泣き顔に笑いを浮べて私を見上げた。これは私の心の落着かなさから生じたことである。私はうかつだったと思い、気をつけてKの傍にいるようにした。けれども次々に登校する子どもの中には、私が立上ってしばらく相手をしないとすまない子どももいて、私は両方の子どもの間をうろうろしてしまう。

また気が付くと、門のはるか手前の椿の樹の植込みの彼方で立止り目を凝らして庭の方をうかがっている子どもがいる。R夫である。この前に会ったのは卒業式の日で、私の式辞の最中に手をひいて遊びを要求したのだった。父親がいそいで連れにきて、それ以後私はR夫と会っていなかった。彼は私とかなりの時間一緒に遊ばないと一日が滑り出さないので、前学期には私はこの子ども

と朝のうちを過すことが多かった。この日、R夫は学校の庭が前と変わらないままかどうかを樹木の間からうかがっているように思えた。私が手をふると遠くから笑い返して、走って門から入ってきた。これは学校の環境の変化を予想した子どもの反応である。私はいつもと同じようにこの子どもと身をいれて遊ばないと、学校に対する信頼を揺るがすことになると思い、一方にKのことも気になりながらR夫について部屋にはいった。ずっと時間がたってから見ると、Kは他の先生とたのしそうに遊んでいた。私が傍にいられない状況になったとき、この子どもは私の心配をよそに、他の先生の手をひいて新しい展開を試みたのだろう。こうして子どもは私の見ていないところでいろいろの人とのつながりの輪をひろげていくのだと思う。

R夫も私が新しい子どもとかかわっている間に、今年度のクラスの担任の先生との間で新しい関係を展開して遊びはじめていた。

外から見たら、私とこの子どもたちとのつき合いはい

つもと変らぬように見えたかもしれない。けれども、私から云えば、KもR夫も学校側の新学年度の環境の変化に応じて、早くも新しい生き方をつくり上げようと試みているのではないかと思う。

新しい学年になると、クラス編成、友だちの顔ぶれ、担任の配置、教室などが変化する。子どもには、以前と同じ空間が違って感じられるだろう。できるだけ子どもにとって戸惑いが少なくてすむように、こちらも身をいれてしっかりとつき合いたい。しかし、おとなの側にも環境の変化は大きい。まだ慣れていない新しい子どももいるし、担当のクラスもかわり、新たに要求される役割もある。その私の側の変化によって、私は以前と同じように振舞っているつもりでも、子どもにとっては違ったように感じられるだろう。子どもはそれに敏感に反応する。新学期、互いに戸惑っている私たちである。

新学年度のはじめには、否応なしの変化がいろいろあるから、子どもたちができるだけいつもと同じような自分自身の生活ができるようにと、私共はあらかじめ考慮した。ひきつづき来る子どもたちにとっては、卒業式、入学式と特別な日が重なるのは遊べない日がつづくことだから、昨年から私の養護学校では入学式は新入生だけにして、新学期のはじめの日から弁当をもっていつもと同じ生活ができるようにした。また、子どもが馴染みの部屋に好きなようにゆけるようにと、職員の間でとくに確認し合った。

変化とは、人の内的な面からいうならば、自分自身および周囲に対する感じ方が以前とは違っているという相違の感覚であり、現在に自分がまだなじまない感覚であり、したがって予測のつかない未来への不安を伴っている。そこで変化に直面して人はまず以前のままの同じ自分を保とうとする。しかし変らない状態を維持しようとすると現在は不満のもととなるだろう。むしろ、以前とは違う状況におかれている自分自身を受けいれること。そして新たな自分を形成しはじめることにより、変化をより高い次元への展開とかえることができる。環境の変化には自分がそこに押出されてゆくという受身の側面が

あるが、それだけでなく、自分が進んでそれを引き受けて新たな自分をつくり出すという能動の側面がある。すなわち自分としての新たな課題にとりくむことである。それが具体的にどのようになされるかは人によってまちまちであり、人生の時期によってもちがう。

新学年のはじめには、おとなの側が環境の変化に戸惑っている。保育者は子どもと生活を共に生きることを自らの人生とする者であることをあらためて自覚し、そのことに身を委ねることが受身から能動へと生活を積極的にかえてゆくだろう。予測もしなかった新学期の混乱に当面し、あらためて子どもの側に立つ覚悟をきめることにより自分と子どもとの生活を新たなものに形成することもある。また、同僚や親たちと共に子どもを育てる生活をつくることに保育の新たな意味を見出すことも重要である。いずれも、変化に直面して、新たな状況にある自分を受けいれ、より広い視野に立って、新たな自分を形成する行為である。

このことは子どもも同様である。子どもが変化の危機を成長の契機となしうるかどうかは、同じ状況を生きるおとながそれをどう生きるかということと関連しているのではなかろうか。

（愛育養護学校）

SF的読み解き
子どもという風景

第二十七回　時の流れ

堀内　守

溶解するもの

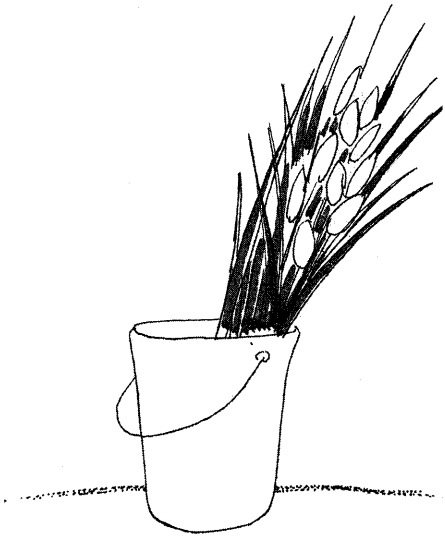
水を張った容器のなかに墨汁を数滴落とす。墨は水の面をゆっくりと広がっていき、さまざまな紋様を形づくる。

あるいは味噌汁。みの少ない味噌汁ならば、お椀に盛ると、噴煙の動きにも似た激しい動きを示す。熱い味噌汁の場合にかぎる。冷たい場合は、紋様はもっと緩慢にしか動かぬ。

動く紋様は人の関心をひきつける。どのように紋様が変わっていくのか、待ち遠しくなる。なにげないことのように思えるが―。

哲学者の手にかかると、こういうほほ笑ましい事柄が大問題に変わっていく。もちろん、「大問題」のなかには仰々し過ぎて、ついて行けないような問題もある。しかし、時には「なるほどな」と感心させられるようなこともある。

水を張ったコップのなかに砂糖を落とす。それが水に溶けて行くのを眺めたのはあのベルクソンである。どん



な砂糖だったか。どんなコップだったか。そんなことは第二次的なことだろう。それよりも、このような例をあげながら、時間の本質は「待ち遠しさ」にあると彼がのべていくことを重視したい。

「待ち遠しさ」は、ベルクソン哲学の用語では「持続」というように表現されているが、それよりも「待ち遠しさ」の方がわかりやすい。わくわく、どきどき。こういうときめきの方に目を向けよう。「持続」という術語になると、こういう身体のときめきは拭い去られてしまうようである。

もうひとつ。コップのなかに砂糖を落とすという例にこだわってみたい。ベルクソンといえば、二十世紀の初めまでフランスの哲学界で人気のあった人である。写真で見ると、端正な顔つきをしていて、いかにも学者然としている。

この学者が、コップのなかに砂糖を落として眺めるという例をひきながら時間について説いているのが面白いではないか。

眼前でそういう実験をやっているのではない。実験にはあのような「待ち遠しさ」はない。同じ「待ち遠しさ」でも実験の場合は冷静なものだろう。ところが、ベルクソンが挙げているのは、彼が子ども時代に経験したとおぼしきことなのである。端正な大哲学者が子ども時代の遊びを思い出しながら、時間の本質を説いていく——ここのところが何とも言えぬ味わいがある。ほほ笑ましい。

時間の空間化

大哲学者の子ども時代——というようなことを想像してみることも面白いが、右の砂糖の溶解していくのをじっと見つめているというような体験は、だれにでもあることだろう。

さらに面白いのは、時間という目に見えぬものを説明するのにはそういう具体例がどうしても必要で、具体例はしばしば時間の空間化という形をとらざるをえないということである。

私たちは、「時間」と「空間」を二つに分けて考えるのに慣れているけれども、実は時間と空間は別々のものではなさそうなのである。だって、日常、だれでも時間を空間にひきつけて、やっと時間を生きた形で体験しているではないか。「時間に追われて」、「時が流れ」、「時をさかのぼって」というようなぐあいに。

すなおに考えてみると、時間の観念は空間の観念よりも遅れて発生する。経験的にもそうである。また論理的にもそうである。

時間と空間は厳正に分けられない。なかには、これらをキチンと分けて、生マジメにそれぞれの純粋なカタチを取り出そうとして努力する人もいる。時間のエッセンスは何だろうとか、空間のエッセンスは何だろうというようなぐあいに。エキスを蒸溜する努力に近い試みである。

ところが、反対に、時間を空間のイメージに置き換えたり、空間を時間のイメージに置き換えたりする、おおような試みもあとをたたない。むしろ、こちらの方が時間のゆたかな姿をより具体的に明らかにしうるようだ。前の試みをエキスの蒸溜にたとえてみたから、ここで後者の場合を何かにたとえてみると、時間に身を委ねる試みとでもいうべきか。

直線のイメージ

現代の人間は時間を直線で表象するのがふつうのようである。時間が過去から未来へと向かっている。そして、過去は私たちのうしろにあり、未来は先方にある——というように。前後関係なのである。

もしも反対に、過去が私たちの前にあり、未来がうしろにある、というように感じている人がいたとすると、それは異常なことである。

現代人は、時間をまず前後関係でとらえているのである。

以上は一般論である。ところで——

古い時代の時間の観念やら、子どものもっている時間の観念などを照合していくと、時間は昼と夜、夏と冬、

若さと老い、というようなあいだを行ったり来たりしている。

異質な時間

昼と夜は本来はまったく別の時間だった。昼と夜とをひとまとまりにして「一日」と呼ぶのは比較的新しい習慣である。

昼は明るく、夜は暗かった。そういう異質の時間が代わるがわる交替する。昼の生活と夜の生活とのあいだにはまったく異なる役割があった。

その交替の境い目が問題だった。つまり、異質な時間の境い目だから、すらすらと移行するわけにはいかない。というわけで、その境い目は実にあいまいな、不気味なものだった。「昼」とも呼べぬ。「夜」とも呼べぬ。

たがいに正体が分かり合えぬ、不明分な場面だった。「たそがれ」とは、「誰ぞ彼」から来ているのではないか、とは民俗学者の柳田国男の論じたところである。人間がたがいに相手の顔が理解できぬ時間。妖怪が出現する時間という、あいまいで、不気味な感じ方がこの表現のなかに息づいている。

子どもの生活時間には昼と夜の交替が異質な時間として体験されている徴(しるし)が見える。起きている時間と寝る時間という全然別の時間があり、境目はやはりあいまいで、不分明である。「睡魔が襲ってくる」。「寝つきがよい」「寝ざめがよい」「寝賢(ねざと)しい」。「寝ぎたない」。「寝ぎわ」「起きぎわ」。「寝むつかしい」。何とにぎやかなことか。

流れる時

時間がいちばん何にたとえられているかを調べる。川である。時は「流れる」という感じを理解するには川の表象がいちばんふさわしいようである。

これにもいろいろな「川」がある。

昼と夜という小さな時間の交替などを無視して悠々と流れる大河にたとえる形而上学的時間は、古くはヘラクレイトスや孔子などにも見えるところである。かと思う

と、川の泡に目を向ける鴨長明のような人もいた。泡を「うたかた」と読ませるのも、ちょっとした心づかいで、孔子やヘラクレイトスの交響曲のような発想にくらべると、演歌風だ。もっとも、これらはいずれも相対的なものである。孔子やヘラクレイトスの「河」をワルツ風に作曲できるかも知れないし、鴨長明の「うたかた」を「あぶく」ぐらいに表象し、童謡に仕立てあげることだって可能である。

せせらぎ、小川、泉、何々川、河、滝、湖、というように、「川」の変貌のなかで「流れる」の表象も変わる。しかし、共通しているのは、「流れる」に、ある運動性が含まれていること、ある方向へ流れていること、切れていないこと、戻ることができないこと、の四つである。

「流れる」のなかにはこんなにも根本的な意味が含まれているのである。

流体

容器に盛られた水、一方から他方へ流れていく砂。これらは流体である。子どもにとって、身近な遊びの仲間である。この遊び仲間は、あの「川」の表象をもっと身近なところにもたらす手段だった。

ポタリ、ポタリと落ちる雨だれ。しずく。

これらが子どもの関心をひきつけるとすれば、そこには少くとも四つの要因があるからということになろう。すなわち、運動性、方向性、連続性、不可逆性。

雨だれ。しずくが形づくられていくのは、スローモーションで見ていくようなもので、運動の分解に似ている。あるていど大きくなると、水滴は落下する。その瞬間、その水滴のふくらみは形を変えて落ちていく。

時間の観念は、こういういとなみやできごとの集積なのであろう。砂場で作った山の形や町の形が、一夜明けてみると、すっかり変わって残骸になっていたり、廃墟になっていたりする。雨でも降ろうものなら、園の庭にある砂場は廃墟さえも残さずに激変する。

上下

時間の根元的なイメージには上下の表象もある。わかりやすくいえば「伸びる」などがその典型である。「大きくなる」などもこれに含まれよう。木ならば「伸びる」にせよ「大きくなる」にせよ上方へ向かっていく。根は反対に下方へ下方へと「伸びて」いくはずであるが、これには横のイメージもある。

「大きくなる」とは、背丈、体重、胸囲、足、その他もろもろの部分が変わっていくことを示している。そこにも暗黙のうちに運動性や連続性、それに不可逆性が含まれているわけである。

昼と夜という異質の時間の交替、その境い目の不分明な両義的な時間などとくらべると、時間の上下のイメージは、過去、現在、未来という連続的な時間のイメージとよく似ている。

のみならず、上下の時間イメージは、下から上へと価値の上下をも示すように変化している。上位、上方、いずれも下位や下方よりもネウチがあると見なされている。

「川」ならば、上方から下方へと流れるはずであった。ところが、いまや反対に、下から上へと「登る」のである。

体位の向上、成績の上昇、地位の上昇。

「川」とくらべたら大きな変化である。

いじる

時の彼方に消え去りそうなことばに「いじる」ということばがある。「土いじり」などという形で復活してくるきざしもないではないが、手でもて遊ぶこと、こねまわすことである。粘土いじり、砂いじりという表現もある。

こういうことからもわかるように、「いじる」というのは何よりも手の対象であるというところに特徴がある。出来不出来よりも、手の感触を楽しむことがいちばん重視されている。時間を手につかむことでもある。

「川」などで表象されていた時間が上下の時間イメージ

に変わり、下から上へと昇ること（昇進、昇任、昇給等）が支配的になったのは産業社会の成立と密接に関係している。余分な説明は省略して、端的に「出勤時間」「勤務時間」「時間給」「休憩時間」「勤務中」等があたりまえになったのを思い出すだけでよい。息詰まるような時間厳守からのがれるための「土いじり」などが見られるようになった。時間はコマ切れになり、「お暇ですか」などと訊ねると失礼に当たるような社会である。

こんな社会のなかでは「いじる」ということも十分にはできかねるようで、悠々と「土いじり」をすることができず、苛々、せかせかと「土いじり」をして、さっさとおしまいにするというようなことも起こりかねない。

小さな歴史的時間

どんなにうまくできたとしても、「いじり」にとっては偶然的である。子どもがつくった作品もいずれは時の流れのなかで色あせたり、こわれたりしていく。そして跡形もなくなってしまうだろう。

しかし、ふしぎなことに、その経過は、あの「いじり」の対極にある「鑑賞」としくみが似ているのである。まずそれは、つくったものに対する〝距離〟の置き方としてあらわれてくる。ある時、自分が、あのようなものをつくったのだという〝対象化〟である。その作品の対象化と、それを作った〝自分〟の対象化でもあるからだ。

変なものをつくっていたのだ。そういう異様さ、滑稽さ、おかしさ、テレくささ、なつかしさなどが入り混った感情が〝距離〟をつくり出す。

「まだとっておきたい」「もう捨ててしまいたい」の間で揺れる感情。

時間という主人公が幼なかった自分のいとなみを浮き立たせて見せる。それは幼なかった頃の写真を見せられたとき浮かぶ感情に近い。

あの頃から見たら〝自分〟の時間的視野も広がってきた。そういう別の感慨も湧いてくる。

つまり、まず昔の作品がそこにある。それがつぎに昔の〝自分〟を物語り出す。そしてさらに〝昔の自分〟と〝今の自分〟がつながってくる。その〝つながり〟は一直線ではない。ねじれ、くびれ、いびつである。その痕跡を「いじる」こと、そこから小さな歴史的時間が生まれてくる。

不在のものの現前

歴史的な時間は、どんなに素朴なものであっても、いま、ここにないものごとを現にあるようにつくり出すバネになる。

幼ない頃の「いじり」の跡がどんなに変なものに見えても、一面的な評価で終わることはない。その作品がおかしげな、あやしげな出来ばえであればあるほど、いまにおける評価はより多面的になるであろう。

かつて、その作品を自分がつくった。自分が主人公だった。それと同じように、こんどはその作品が〝自分〟に向かって何かを語りかけてくる。そのように感じとれるからである。

作品は、きっかけを与えるにすぎない。

何があらわれるのか。

『失なわれた時を求めて』という大部の作品を残したマルセル・プルーストは、その作品を、ケーキを一さじ口にした時思い出した昔の光景から書きはじめている。ありうることである。一口のケーキはきっかけを与えたにすぎない。本来、それは何も思い出させなくてもよいのである。別の思い出を浮び起こしてもよいのである。そういうもろもろの可能性のなかからある風景が浮かんでくる。

面白いのは、思い出される風景が、上下の時間のイメージではないということである。

「川」のイメージでもない。さらにその先に異質な時の交替としてあった昼と夜、しかも昼から夜への変転の境い目の時であった。

ベッドに入った。けれども眠れない。そんな時にやってきてくれた母の思い出がまっ先に書かれている。これ

は偶然だろうか。

縮少模型

昔の〝自分〟の作品がそこにある。〝距離〟が充分にとりきれない場合、「これはわたしのだ」といって、所有を主張するだけで終わるだろう。その作品はモノとして扱われたのである。だが、少しでも〝距離〟を取れるようになると、そのモノは単なるモノではなくなる。意味を発信しはじめる。

〝この作品〟が〝昔の自分〟を語りはじめ、さらにその意味を読み取るいまの〝自分〟へと動いていく。

してみると〝この作品〟は、縮少模型のように〝自分〟の手のうちで「いじる」ことができる。あの頃の自分、いまの自分、あの頃の人びと、あの頃のできごと、いまの自分、いまのできごと。こういう間を往ったり戻ったりする話題の提供者が〝この作品〟にほかならない。

時として、充分に〝距離〟がとれぬ場合、子どもは苛立つ。〝距離〟が全然とれないならば、結論は簡単である。が、〝距離〟は若干とれるが、表象の力が充分でない場合、表象したくても、何をどう表現していいのかわからぬ。その〝自分〟が情ないので苛立つ。

子守歌の形而上学

子守奉公のつらさをうたった子守歌もある。が、ここでは子どもを愛の世界に誘う子守歌の方に目を向けよう。

時間という観点から見るとき、この種の子守歌は、いちばん古層にある時間のパターンを根底にもっている。昼と夜という異質の時間の交替、さらに異様な境い目。その境い目。その境い目の不気味さを子守歌は手なずけてしまうのである。古い古い時代の呪術や祈りに似た構造により手なずけてしまう。歌詞の出来ばえよりもメロディが、メロディよりも歌いぶりが物をいう。

産業社会が高度に発達して「勤務時間」も一様ではなくなってきた。忙し過ぎる反面、余裕が出ても、それを

どうやっていいかわからぬというような現象も出てきている。夜と昼の境目もあやしくなって、二十四時間営業の店舗も増えつつある。ニューミュージックの多くは、子守歌に似た構造をもちはじめた。

小さなカプセルのような部屋でそっと聴く音楽は、行進曲でもなければ交響曲でもないだろう。それはつぶやきに似ているし、「いじり」にも似ているように思える。

それにしても川の歌が多い。実に多い。読み取り方によっては、あらゆる音楽が「川」のイメージをもとにつくられているのではないかと錯覚されるほどである。

でも、それらであっても、ストレートに川をうたってはいない。かならず「川」によって別の何ものかを表現している。何ものかといわれものをつぶさに「いじって」みると、すべてが時間の形に見えてくる。その時間の形は、いろいろな形が組み合わさっていて、純粋なものを一つだけ抽出しようとしても無理であること、むしろ、多様さをそのまま味わう方が実りが多いことを教えてくれるように思える。

子どもはこれらの時間とともに生きている。まさに「生きられたる時」の權化のように。

（名古屋大学）

回顧

川崎千束

東京家政大学の付属幼稚園は昭和廿八年六月に、学長青木誠四郎、園長山下俊郎という心理学の二権威によって創立されました。当時のキャンパスには、樫・椎の樹々が六百本近く茂り合い、垣根には枳殻が廻らされていました。私は又とない環境に感謝して、幼児たちを、この有難い自然に融けこませ、豊かな遊び心を育てて、のびのびとした保育であらしめたいと念願しました。

開園してから二年目かに、理事長室に呼出され、「孫の通っている〇〇幼は（有名な私立幼）いろいろのことを教えてくれるので、母親たちは大変よろこんでいる。しかるに、この理事長室から見ていると、ここの園は遊んでばかりいるようだ。〇〇幼を見習ったらどうだ」と、とがめられ、「ハイ」と、引き退ってくればよかったものを、

「〇〇幼は〇〇幼の方針でしょうし、ここの園は家政大付属としての方針の保育です」と見得を切ったおかげ

で、爾後、幼稚園の予算の通り工合が悪く困惑しました。

保育修了式の案内状に、その理事長名を先に、園長名を後に記すようにも言われましたが、園長名だけの案内状にしました。当時、大学の入卒の案内状は、理事長・学長の順の連名のものでした。現在は、学長名だけに修正されています。

然し、この理事長に言われたことは、当時の私の深い悩みでありました。理事長は銀行の支店長を歴任して理財には長けていても、教育面では門外漢でしょうから、その言葉は聞き流されたのですが、園長の山下先生は、私の保育方針を諒として許されているのか？

学園広報などには「倉橋先生の教え子であることで一も二もなく来てもらった」と記されているものゝ、それを文字通りに受け取ることには、躊躇されるものがありました。

山下先生は寡黙の上に、保育の実践については、何ひとつ容喙も指導もされませんでした。更に私の悩みを倍加させたものは、山下先生の教え子の児童学科卒の同僚の言動でした。「保育は牧歌的でなく科学的でなければ」と一にも二にもデータとりに熱心だったからです。その頃、倉橋先生の保育理論を牧歌的だと評するむきもあったようです。それに心理学の隆昌は、まさに燎原の火の如く、山下先生は次から次へと、心理学の本を出版されました。ゲゼルの訳著から始まり、幼児心理学・教育的環境学・幼児の心理発達・ひとりっ子の心理と教育・児童心理学・家庭教育、等々。それらが出版される度毎に、先生の著書を味読し、その理論の勉強に努力しました。著書はどれも理路整然としている上に、平易な言葉で叙述されているので、浅学の私にも理解が可能でした。

私が倉橋先生の講義に魅せられたのは、

「一般の仕事は、外に向ってのみ行われるのでもすむ。教育は、そこが全く違うのである。先ず、内へ向かっての教育なくして、外へ向っての教育はあり得ない。

教育の必要性を、それぞれの方面と部面とに於て、いろいろに主張する論もある。

しかし、人間を人間へ教育するということは、われ等の一日一刻も忘れてはならないことである。われ等の責任感の出発も帰結も、此の教育大本の自覚によって始めて厳かである。子どもと共に嬉々としてあそび暮しつゝ、人間教育の厳かさに生きるもの、それが幼児教育者である」にあるのです。

私は明治の終りから大正にかけて、誠に味気ない幼稚園生活をすごしました。その二年間先生とも友達とも遊んだ記憶はなく、登園から降園まで、会集に始まり、フレーベルの恩物と手技と唱歌というぎっしりつまったプログラムで管理され、不得手な手技に悩まされ童話も一度もきいたことがなく、今、記憶に残っているものは、母が話してくれた昔噺ばかりです。このように、幼児としての時間と空間が与えられなくて、何で健全な精神発達をするでしょうか。私はこの時期の保育に根ざした私の性格面のマイナスを今も残念に思っています。

保育科に入学して、フレーベルの偉大さも哲学的なことも、倉橋先生の講義によって識り、若い心は、自分なりの保育の理想に燃え立ったものでした。

山下先生も、著書の中で

「幼児の生活は、すべてが遊びであり、そのあそびには、非常に多くの心身の働きがふくまれ、中心となっている心の働きは複雑なこみ入ったものである」と記されていますが、研究熱心な同僚は、こどもの遊びも、

1 感覚を働かせて、たのしみを呼び起こす。
2 手足の運動が楽しみをもたらす。
3 周囲の生活を模倣することを楽しむ。
4 絵本・レコード等の受容あそびを喜ぶ。
5 組み立て、砂場、絵を描くなどの構成あそびを好むようになる、と分析します。

こういうのが科学的なのかと、私は戸惑い続けました。

ある夏の休暇中、愛育研究所の斉藤先生が大学へ講演

に来られて、幼稚園にも立寄られた時、園舎を案内された山下先生が、

「何もしておりませんので」と恐縮気味に語られた。先生は、どういう意向でこの言葉を言われたのだろうか。単なる社交辞令か、それとも、心底、何もしていないと思われての言辞なのか。私は園庭の遊具の一つ一つにも、風物的と機能的の両面から慎重に考えて設置している筈なのに。私のこの低迷する心を、慰め、はげましてくださったのは、故山下治子夫人でした。「先生を信頼しているのですから、思い通りにおやりください」と。

毎年の園児募集は定員の四・五倍の応募がある一方、働き人も幼教一級の免許を取得した若いひとたちと世代交替になり、このひとたちは、在学中に得た保育とは、という定見を持って子ども達に接しました。倉橋先生の、〝子ども達と楽しく遊び得る人は偉い人である〟を、そのまま実践し幼稚園は好ましい雰囲気に包まれました。私は今もこの時期の若い働きびとに感謝の念を持ち続けています。

晩年の山下先生は、保育の方法は、間接的で且つ生活的でなければ、と強調されるようになりました。このことは先生にとって、喜ぶべきか、かなしむべきか、私は複雑な気分になりました。

とあれ、子守り的な保育を、心理学に基いて、教育体系に確かな位置づけをされ、保育学会会長として、心理学を台頭させ、多数の著書は版を重ね力漲っていた壮年から晩年は円熟の域に達せられたとみるべきでしょう。

昨夏、高二の代表三名が私宅を訪ねてきて、来夏は受験体制に入るので、今夏中に是非幼稚園の同級会を催したいとのことで、暑いさ中、水上バスで隅田川を溯って十六名出席の（同級生廿二名）クラス会になりました。

その時、幼稚園でよく遊んだ。キャンパスで拾った椎の実は炒ると美味しい。雨蛙採りにも行った。箱根の寮に泊った夜のお化けごっこ。キャンパスで先生にも知らせなかった冒険の樹。枳殻垣根の黄アゲハ蝶の卵を度々羽化させた。銀ヤンマも。あれは見事だった。夕暮に、

明治神宮の内苑で塒にかえる鳥の群れを見に行った。あの時原宿駅に迎えに来たお母さんの顔がやさしく見えたっけ等々。話題はつきませんでした。

最近の来信の一つに、

大学に入学、法律を勉強することになりました。私立高校の三年間が私にとって、とてもプラスだったこと、そして自由だったことが思い出されます。高校の他にも、どこかで同じような経験をしたなあと思います。それが幼稚園での生活でした。私の記憶の中で不思議とはっきり思い出されます。それはきっと、毎日が楽しく充実していたからでしょう。(後略)

オーストラリアのマイヤーズ幼稚園を朝の八時半頃訪問しました。玄関先にカーペットを敷いて、その上で柔かい陽をうけて、先生を中心にして子ども達が、先生の膝にもたれたり、肩に寄りかかったりして、何やらガヤガヤ言っています。通訳によると、一週間ほど前に屋根で孵って、屋根から落ちた鳩の雛を育てているとのことで、先生が小さい嘴を開いて餌付けをされている、その手許を子ども達がのぞきこんで、話し合っているのでした。

この平和な一幅の絵を見るような光景は、いつまでも私の心象に残っています。この園の子ども達は、それぞれが遊びを創造していて、どの顔もどの瞳も輝いています。本当の保育がここにあると深く感じました。津守先生も廿年先のこの子達が期待されると、話していられました。

草と風とがたわむれているような日本の五月の原っぱで、七・八人の女の児が車座になっていて、その中心に、学校を出たての若い先生が座っています。若い先生はナズナの花で、ひとりひとりにかんざしを作ってやったり、カヤツリ草で蚊帳を吊ってやったりしています。子ども達は「先生、作って。作って。」とねだっていますが、先生も楽しそうな笑顔です。私は幼稚園雑草の中の「子どもと遊べるひとは偉いひとである。子どもと一緒に楽しまれるひとは、更に偉いひとである」という言

葉を思い出しました。

現在の幼保の経営者の中には、このような得難い先生を、おっとり型として拒否する傾向があるのを憂えます。何事も短絡的で、水際立つような保育を母親たちが満足すると考えているからでしょうか。

泣く

周郷先生が、お茶大付属幼稚園の園長先生の頃「いやになっちゃうね。入園式に泣きもしないんだから」と、話されたことがあります。私は、新入園児を迎える度毎に「泣く子がいませんように」と祈りました。

「泣くのが当り前だよ。大人だって、いきなり集団の中に入れられたら、泣きたくなるじゃないか」しかし私は、周郷先生は園長先生だから、そのように仰しゃられるのであって現場の者は、あちこちで泣かれたら、途方にくれてしまうものをと心の中で反発しました。

ある時、ひとりの母親の手記を読む機会があり、私が職業馴れしてしまい、ナイーヴさがなくなって傲慢でさえある事に気付いて深く恥入りました。手記は次のようです。

下の子をおんぶして、しのと手をつなぎながら、私は今日はじめて、この子と別々の行動をするのだと思いました。

生れてから今日まで、いつだって、手のとどくところにしか、離れることのなかったわが子です。

この篤い母親の心を慮らないで、泣く泣かないなどと、身勝手なことだけを考えていた浅はかさ。その子どもたちを受け入れるということは徒や愚かであってはならない。謙虚な心で、この子ども達と結ばれるえにしの厳かさを、しっかりと受け止めなければ、人間を人間へ教育することはできないのだと悟らしてもらいました。

（元家政大学付属幼稚園）

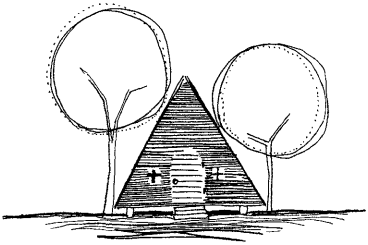
「光と影」

土橋光子

私がこの園に勤めて1年11ヶ月が、流れる水のように過ぎていった。つかまえることのできない流れの早さであったようでもあり、又そのなかで束の間にちらりと見せてくれたかげのように、水中の光に踊り、はねかえり岩かげか、川底にそっと身をひそめている魚、こどもの遊ぶ様もこれに似ているように思う。

☆園庭にて！

雨あがりの園庭に陽の光が一杯にさして、ぬれた砂地をやわらかく、つつんでいる。



登園してきた子どもが、身仕度をすませて2、3人園庭にでている。水たまりのそばによったり、固定遊具の方へ走ったりして遊びはじめる。5、6m程の距離なので、その動きは手に取るように見えるが、水溜りを覗きこんで話している声は、何の話をしているのか理解できない。ただ大変たのしそうに顔を寄せ合い、指さし、わらいあう、おどけた格好をして水たまりをピョン！と飛びこえて、遊具の方へ走っていった。（S61・6月朝）

その姿はななめ後から陽の光を受けている踊りながら走っていくのびのびとしたかげ、その影の持ち主は後を追って走る。

このような姿は、どこの園でも見られるものだと思う。勿論、本園にもあった姿だと思うが、私は黒いベールでおおわれ、闇の中に立ち、この愛らしい子どもたちを見失っていたようだ。

S60・5月、4月入園の年中男児3名、Yu、Yo、Hi、E（園長）T（担任）私（土橋）

☆砂遊び！

二年前へ逆もどりして遊びの中に見られる小さな事例を書いてみよう。

Eが砂の庭にうずくまって遊びを覗きこんでいる。私も少し離れたところから仲間入りしたくて、そっと見つめている。

3人は砂に水溜りの水を掬ってはまぜ、せっせとこねている。Yoは器に詰める。Yuは砂を片手で握りしめて、その手をそっと開いて見る、くずれている、又握る、開く、片手で握る砂は柏餅のような形をしている。3人は黙々と、握る、詰める、水を加える。思った様なものが出来たのであろう。

Yu「はい、これ！」

E「これ、なあに！」

Yu「たべて！……いいよ！」

Eは、口もとにだんごらしきものをはこぶ

E「おいしい！」　言葉に力がこもる。見つめて、そこに立ちつくす私のところへも、おすそわけの器がはこば

れてくる。Hi、Yoがかきまぜて作ったコーヒーをはこぶ。

Hi「はい！」　私はそっと受け取って飲む。

熱いような気がする。あの熱心にかきまぜていたYoの真剣さが冷たい泥水に熱さを加えたようである。

私「とってもおいしくはいっています！」

「ごちそうさまでした！」2人は私が飲みおわる迄、じっと見つめていて満足そうに、にっと笑顔を見せる。丁度その時「片つけ」と入室コールの声が聞えてくる、担任が先頭で次ぎつぎ子どもたちの遊びの輪に声をかけながら回って来る。

庭いっぱいに散っていた各組のグループも何となく遊びの活動がとまり別行動が始まる。

T「ここの方も片つけましょう！」　この声にYo、Hiはさっと立って列の後につく。……Yuのみ、次ぎつぎに作ったご馳走をはこんでくる。いつの間にか庭にはYuと私とあと少しの人数のみになる。少し心配になり、

私「Yuくん最後の人がはいってしまいそうよ！」　無言の時が流れる。

Yu「いいよ、かたつけてからいく……」

その後、約10分ぐらい、ゆうゆうと泥をこね握っては並べた数個の砂だんご……、Yuは急にぱっと立ち上ると、

Yu「ねえ！片つけておいて……」　と叫び、とめる間もなく玄関へ吸い込まれるように走り去った。一瞬、私の口は、あっと開いたが間に合わない、「いいわ、私も仲間だったのだから……」と道具を集め、水洗いし片つけにいく。ワゴン車一杯に乗った道具、最後に入室する保育者と子どもたちによって所定の場所に帰る準備がされている。

さてその道具は砂と泥によごれて暗くわびしい感じである。（朝の自由遊びの終り）

●明日に向って明るく輝くために、ちょっとの時をかけて、子どもと共に水で洗いおとしていたら、明日の光が子どもをより明るくするであろうと思う。明日又よごれるからよいと決して思っているわけではないが、次の時

間帯におくれると、一日の計画が実行されないのである。（計画が光であり子どもは影）

大人にとっても、子どもにとっても、自分の使った物を綺麗にして、もとに返すと言うことは、生活の基本の大切な一つであると思うが、これは保育者だけの後の仕事となるのであろうか？　とつおいつ考えながら、最後に走りこんでいったYuの事も少し心配である。すんなり受け入れてもらえただろうか？ひともんちゃくあったようだ。

＊　＊　＊

S61・4月　年中女児i、男児数名A、B、C

光いっぱいの朝、水曜日（半日保育）入園して、何となく落つかない子どもの中でiが動きはじめる。

黒板にぴったりつけて机が二台並べておいてある。子ども二人が、並べる程の空間。iは洗面台と机との間に入りこんで、チョークで黒板に向って絵を描きはじめる。

私はチョークの動きをなんとなく目でおっていた。iは感じていたらしく私を見上げ話す。

i「これちちはしてんてい！」（土橋先生）

私「あら、わたし、すてきですね」ふたつめを描きはじめる。描きながら話かけてくる。

i「おともだちよ！」

私「なんていうかた？」

i「おかあさんでね、こまつざわちえこ！」

だんだん絵が大きくチョークが濃くなる。

i「ちえこおかあさん！」

手のとどく空間が狭められてくるが、絵は大変大きく大胆になる。

i「おかあさんが、イヤリングとネックレスしていいよって、いったので、それしてなわとびしてるの！」

この頃から男児A、B、C、も描きたいと言って机の上にのってきたので、話し合って机を前に出すことにする。

私「お机を少し前に出して。チョークさがしてあげまー

す。ちょっとおまちくださーい！」

黒板の上の箱から取り出したチョークを何本かに折って

私「これだけですから少しずつですけど、どうぞ……」

と一人ずつに手渡す。

A「ありがとう！」 B、C、もAにならって挨拶をして受け取り、Bはさっとiの絵を消しにかかる。

私「あっ！ 少しせまいけど、お友達の絵も 大切にしてあげましょうね！」この言葉に半分消してしまった絵を見て、B、こまった顔をしてうなづく。

i「それきえそうだから、消していいよ！」黒板の絵はパーマン、「マジカルエミ、へんしんするの！」黒板は背のとどくかぎり描かれる。

iが描きはじめて約10分が過ぎた頃には、黒板は絵で一杯になり、描き手は交替される。10:00〜10:10一人だった描き手は、10:10〜10:30迄の20分間に入れ変り立ち変り10名近くの子どもが黒板と言う狭い空間に居場所を求めて集まり、そこから外の世界へ旅立っていったように思えた。

机と黒板と言う、子どもが横一列に、くっつきあった何となく寄りそっていないと不安の入園当初に適していたのであろうか？マジカルエミを描いたAは描く前には無言であったが、描き終る頃に私がマジカルと言う言葉が聞きとれなく、何度か聞きなおしたにもかかわらず、心を開いて繰り返し答えてくれたのである。

砂のだんごと道具を置き去りにして自分の思うままに遊んでかけ込んでいったYuも、62年3月20日、立派に選ばれた一人として前に進み出てにこにこと振り向いていた。

狭い場所に体を寄せ合うようにして集まり一人遊びをしていた4才児たちも今年は年長児として、独立し、小さい友達に、自分自身で、園生活を通して、保育者や友人、物や環境を、仲立ちにして、人間らしい生活をしてゆくのだろうと思う。

二年間を振り返って見ると、子どもにも、光のなかに輝いている子もいる。かげぼうしのように、先になり後

になりしてついている子もいる。思うに、どちらも大切な存在なのだと思う。影のない人間はゆうれいも同じであり、実在しない子どもである。

どの子にも光があたり、影をつくる。光のあたり具合で影は、形を変える。そこに何とも言いようのない面白味がでてくる。

一斉保育から遊びの時間をなるべく多くした保育に変様しようとしている園であるが、

① 保育者の考え方や、行動、言葉がけ、態度、応対、等々の最後に、よく待ち、よい影を自分自身が持つことの出来る保育者となることの大切さを思う。

② 子どもに母親の様な存在となれる者、心の願いを正しく伝え解ってもらえる保育者。

③ 子どもと同じ気持ちを持って受け入れ、理解してやることの出来る保育者。

④ 保護者特に母親と共に向上するために常に自分自身を磨いている保育者。

☆この様に数え上げてくると、変えると言うことは、私が変らなければ、なしとげられないことなのだと思う。

さいわい周囲を取りまく人々は諸事に通じ、大変多くのものを持った方々である。年長者も若い保育者も光の中を歩んでいる。私もその一人になりたいものである。

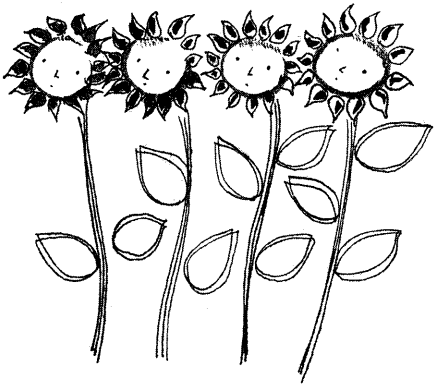
（北区浮間、明日香幼稚園）

ふくろうのつぶやき

—小さな場所に意味がある—

真壁　伍郎

毎年、春になるとつらい別れをしなければならない子どもたちが何人かいます。子どもたちは中学生になると、いちおうわたしたちの文庫も卒業することになっています。



「お世話になりました」などと、めっきり大人びた言葉を使って、子どもたちは挨拶してゆきます。幼稚園のころから来ていた子どもが、もうこんなに大きくなったのかと、改めて時の流れの速さを感じさせられます。

「また、たまに顔を見せてね」と声をかけ、うしろ姿を見送りながら、この子の人生が豊かなものであるようにと、ひそかに祈ります。

子どもには　多彩な人生が
泉となって　ひそんでいる
まだ　もやと霧に
包まれてはいるが

子どもは　ひとつのつぼみ
そこに　木ぜんたいが
また　花そのものが
おおわれた姿で　咲いている

（J・G・ヘルダー）

まだ見えぬその子の将来の姿を予感しながら一人ひとりの子どもとかかわることができる。養育や教育に携わる親や教師の特権はそれだろうと思います。しかも、その子の人生の源となる泉やつぼみはすでにそこにある。いや、すでに形をとり、花咲いているのだとこの詩はいいます。ヘルダーのこの言葉は、哲学者、森有正の言葉をはからずも思いださせてくれます。

「一つの生涯というものは、その過程を営む、生命の稚い日に、すでに、その本質において、残るところなく、露われているのではないだろうか。僕は現在を反省し、また幼年時代を回顧するとき、そう信ぜざるをえない。この確からしい事柄は、悲痛であると同時に、限りなく慰めに充ちている」（バビロンの流れのほとりにて）。

去って行く子を見送りながら、この子どものいた場所に、こんどはだれが座を占めるようになるのだろうかと

ふと思います。そして、その子がいつもいた場所の意味を考えてしまいます。それぞれの子どもがいた場所と、泉やつぼみがあるきまった場所にひっそりとおさまっている情景を重ねあわせてしまいます。

文庫では、不思議なことに、どの子もだいたいきまった場所にいました。ですから、あとで、かつて文庫に来ていた子どもたちのことを思いだそうとすると、たいてい、どの辺にどの子がいたかが見えてきます。なにも席をきめていたわけではありません。それぞれがめいめい好きな場所に陣どっただけです。それでいて、なんとなく居場所が定まっているのです。

体が小さいくせに、いつも後の隅っこにいるちひろさんは、もう三年生です。このあたりで、ちょっと別の場所に移ったらと誘いをかけても、ぜんぜん応じてくれません。

「だって、ぼく目がいいもん」

聞いてみれば、視力は一・五。どうしても彼女（たしかにこの子は女の子、でもいつもぼくといいます）を動かすすべはありません。

大きい子が小さい子の前に座ったり、大きい子どうしがすみっこに寄り集まったりで、まるで秩序もなにもあったものではありません。せめて、卒業する子が出ていった学年初めくらいは、それぞれの居場所の整理をしてやりたいような気持にもなります。

こんなある日、ふくろうがつぶやいていました。

「ほっておけ、ほっておけ。それぞれが気にいった場所だ。子どもが好きな小さな場所には意味がある」

たしかに、ふくろうに言われるまでもなく、そのとおりです。わたしたちにはそれぞれ好きな居場所があります。日当りの良い場所が好きな人もいれば、人目につかないちょっと陰になったところがいいという人もいます。広い、狭いの問題であるよりも、落着いたほっとできるような場所が欲しいのです。人それぞれに幸せを感じる場所があるのでしょう。

そこにいれば、安全だし、好きなことを自由に思いう

かべて楽しめる。なにも文庫のおじさんのわたしのまん前に陣どることが楽しみを増すというものでもありません。その点、教師は、とにかく子どもを前に出したがります、

「そんなところじゃ見えないでしょ」、「お話を聞くなら前がいいのに」などと。

ところが子どもたちは、大人以上に、自分の居場所に固執します。場所が変わると、落着けないし、だいたいお話に集中できないのかもしれません。

十畳くらいのところに三十名くらいの子どもたちがひしめきあうのですから、だれもが好きな場所というわけにはゆきません。わたしたちの文庫では、子どもたちはそれぞれ本をいれるかばんをもってくることになっています。本が雨に濡れたり、汚れたりしないためです。このかばんを子どもたちはよく自分の座りたい場所に置いておきます。お話が始まるまで、本を探したり、外で遊ぶ、その間の場所取りというわけです。そして、その「場」に、もうその子らしい個性が感じられたりします。

四年生のけい子さんは、年中据えつけてあるストーブの前がお気にいりです。そこでこのところきまって詩の本を開いて見ています。穏やかな顔で、じっと詩を読んでいるこの子をみると、どんなすごい世界がこの子の心に広がっているかと、こちらまでどきどきしてしまいます。口数の少ないけい子さんは、将来、エリザベス朝の、だんろのまえで読書する貴婦人のような面影をもつ人になることでしょう。

どうしてこうした、場所にたいする好みが出てくるのでしょう。すでに家庭に置かれたその子の居場所が影響しているのかもしれません。アットホームとコンファタブル（快適さ）は親戚同士のように思います。そうすると、家にいる安らぎ、しかも家のなかで最も落着ける自分の居場所、これがわたしたちのお気にいりの場所の原型なのかもしれません。

近代的な家具をそろえたものの、なんとなく居心地がよくなくて、結局は、部屋の片隅になにか昔どうりの居

場所を確保してほっとした、などというお笑いに似た話を聞きます。また、小学校に入るのだからせっかくふんぱつして買ってやったのに、子どもは全然机に向おうとしないと愚痴る親たちの声もよく耳にします。これなど、自分の子どものころのことを思いだしてみれば、すぐにでも分りそうなことなのに、とつい思ってしまいます。

快適さは道具だけではありません。むしろ道具の傍らに許された、狭いけど自由な空間。そこでの安らぎ、それにはあまり人目にさらされていないことが大切なようです。この点、出たがり、出しゃばることが時代の風潮のようになった現代が、なんとなく落着けないのは無理もありません。アットホームの意味を見失っているのです。

イギリス人が誇りにし、生涯思いかえす言葉が二つあるそうです。昔の話ですから、今は違うかもしれませんが、それはホーム（家庭）とマザー（母）です。もしそれが事実だとすれば、いくつになっても思いかえす安らぎは、ホームだけではなく、マザーとも深くかかわっていることになります。母のぬくもり、母のやさしさ、母のまなざしが注がれていること。これが子どもの落着きや安らぎに深い影響を与えるのでしょう。いやそれどころか、その影響はその人の生涯の最後にまで及ぶのだといえそうです。

わたしの子どものころのお気にいりの場所が、いまから考えると、あまりたいしたところでなかったことに驚いてしまいます。寝間で、寝ながら母から昔話を聞いたところとか、茶の間の片隅で姉や兄からいろいろ本を読んでもらったところなどがそうです。そして変なことにそうした場所のこととなると、折れた障子の桟や、ふすまの落書きにいたるまでよく覚えています。そればかりではありません。そのときの母の様子や兄弟たちがどこに、どんな風にして一緒にいたかまでが糸がたぐるようにどんどん思いだされます。これはきっとだれでもそうだろうと思います。

お話を聞き、空想に思いを馳せながら、実はどんなに

よくあたりの様子を目にいれ、心に受けとめていたかがわかります。これが不思議なところです。空想の目と物事を冷静に見る目は別なものだとわたしたちは信じています。しかし、どうもそうではないらしい。空想の働かない観察は、見た物事を心に止めることはないのです。

ですから、お気にいりの自分の小さな場所でこそ、わたしたちは思いを深め、想像の翼をはばたかせることができ、さらに物事の深い観察と認識ができるのだといえそうです。『おばけリンゴ』を書いたドイツの絵本作家、ヤーノシュはそのことを見事に語ってくれています。

「子どもたちには、その目の高さにあったお気にいりの場所がある。そこにいると、おもしろい話や、楽しいことが次から次へと浮んでくる。部屋のきまった片隅で、また、雨の降る窓ぎわで、子どもは際限もなく思いをくり広げる。子どもにとって、その場所は天国です。立派な部屋や机や椅子があっても、子どもにはどうでもよいこと。要は、この片隅です。子どもはここではとても幸せです。

三歳のわたしにとってのお気にいりの場所は、あひる小屋の板壁のところでした。陽があたってほんのりと暖かくなった乾いた板の壁。地面も暖かくなって、あひるたちの匂いがたちこめています。この坂壁を背に座っていると、いろんなお話が浮んできます。小人や土の精が姿を現わします。立って七十センチ、座れば三十五センチにしかならないわたしにとって、地面に低く生きている小人たちは、本当の仲間でした。

九歳になると、ちょっと離れた木立ち、とくにその柳の木の上が、わたしのお気にいりの場所になりました。そこからは、空がぐんと開け、畑にいる牛や馬の姿がよく見えました。空を飛べたらどんなにいいかなあと思いました。そして、飛ぶときのことをいろいろ想像しました」。

ご存知のように、大きくなってヤーノシュは、その自

分だけが見てきた世界のことを絵本にしました。それが、『おばけリンゴ』です。

よその人の木には、リンゴがいっぱいなっているのに、彼の木にだけは一つも実がなりません。質素ではあっても、お気にいりの自分のベッドにはいると、夢や願いが一挙にふくらんできます。そして、彼はそっと祈ります、

「ひとつでいいから、うちのきにもリンゴがなりますように。そんなにりっぱなみでなくてもいいのです。ひとつでいいからほしいのです」。

こうしてこの本では、小さな場所で、小さく願ったことが、大きな、とても大きな実りとなったことが物語られています。

そういえばわたしも、幼稚園のころ、広い遊戯室の片隅で、ストーブにあたっておられた先生の脚をみて、「でっけーあしらなー」と思ったことがあります。子どもの目の高さにはそれがいちばん目にはいったのでしょう。薪ストーブの暖かさと、その先生の優しさが、その脚をとても頼もしい、なつかしい大根に見せてくれたのでした。以来わたしは、幼稚園の先生にこだわりつづけ、とうとう本物の幼稚園の先生と結婚してしまいます。幼いころの印象が人を支配！してしまうほんの一例です。ですから、わたしは今でも、妻にはこういい続けています、「子どもの目から見える脚には気をつけなさいよ」と。

小さなすみっこで子どもが見ている、そのものの意味を軽んじないようにしましょう。そこで得たイメージの深さ、強さは、生涯のどの時期よりも強烈で、あとまで残りつづけます。親や教師に暖かく守られた安らぎの経験は、いのちへの信頼となるでしょうし、そこではぐくまれた夢は、将来の希望となって育ちます。

小さなすみっこは、また、わたしたちが天や地の自然にふれる場所です。そして、それはそのまま神秘の世界への入口ともなってくれます。

幼稚園での出来事として妻が語ってくれた話をわたし

は忘れることができません。

いつもクラスのはみだしっ子で先生の手をやかしている隆一くんが、ある冬の日、雪の降りしきるなか、すべり台の上に寝ころんで空を見上げていました。担任の先生はそれを見て、あの子また変なことをしている。どうしたのだろうと、窓を開けて呼び寄せようとしました。たまたまそこにいあわせた妻はそれを制していったそうです。

「まあ、ちょっとみていましょう」

空の奥からわいてくるようにどんどん降ってくる雪を隆一くんは、あきもせずに見ていました。やがて自分がそんなところに長くいたのに気がついたのでしょう、彼は雪まみれになって園の中にもどってきました。

「隆一くん、雪が降ってるのを見ていたみたいだね」と妻が声をかけると、彼はにっこり笑って、「うん、気持よかったー」と答えたそうです。

これを聞いて、わたしはすっかり嬉しくなってしまいました。落着きがなく、いつもみんなに要注意とばかり見られていた隆一くんのこの日の体験は、彼の心に深く刻まれたことでしょう。先生が妨げずに、そっと見てあげていたのもよかったと思います。

天の高みから降ってくる雪のひとひら、ひとひらに、彼は生きた自然を感じ、畏れを予感していたにちがいありません。

詩人の八木重吉も似たような経験をうたっています。

かんがえてみると
きょうのいちばんよかったことは
もさもさっとした
けやきの
ひょろながい梢をみていたことだった

ひとり静まった所、小さな小さな片隅、そこでこそ、わたしたちは自然の不思議な力に出会い、異なる世界へと導かれてゆきます。子どもの心を引きつけるすぐれた文学の多くが、こうした小さな場所を起点にして物語が

始まっているのは決して偶然ではありません。ある者は、ころころころがって穴のなかに入り、そこに不思議な世界を発見します。ある者は、ふと見つけた洋服ダンスが異なる世界の入口となります。「狭き門より入れ」は、競争率の高い幼稚園や大学へ入ることではありません。片隅の、こんなものがと思えるささいな門を通らなければ、天国は見えない、人間を超えた力に出会うことはできないということでしょう。

こうしてみると小さな存在である子どもに焦点をあて、「あなたがたは、この幼な子のようにならなければ」と語ったイエスの言葉には、とても深い真理がこめられていたのだと思います。

文字通り小さな存在でしかない子どもたちは、背が低く、大地にいちばん目を注いでいます。また、見あげる空が本当に高いことを知っています。こうした自然への近さ、親しさが、彼らに土や水にたいする興味を引きおこすのでしょう。子どもたちはとにかく、土や水をいじりたがります。文庫へ来ても、なにやかやと外へ出て、石や草や虫を見つけ、水道の水を出したりして遊んでいます。どうも彼らは、昔の人々が、すべてのものの元素だと考えた、火や風や土や水のひとつひとつに、いいしれない魅力を感じているようです。人類の原体験が、子どもにはまだそのまま渦まいているのかもしれません。

最近は精神療法の一つに、こうした土をいじり、草花を育てることが取入れられていると聞きます。それがとても効果があるというのです。地面からちょっとでも高く大きくなろうとする努力を強いられている現代人は、ある意味で、高みに登って全体を見下ろしたいという「高度病」にかかっているといえます。ですから、低いところで、しかも小さな場所で、正直に自然とつきあってみることが、この病気の一番の治療になるのではないかと思います。その先生になる人が、子どもたちです。

幼い子の文学の大きな特徴の一つは、「行きて帰りし物語」だといいます。主人公は、冒険や旅に出てゆきます。しかし、かならず元の場所に、めでたし、めでたし

と帰ってきます。帰ってくるために出てゆくとさえいえそうです。それなら、なぜ出てゆくのか。出ていったときと帰ってきたときのその間に、主人公の成長があります。元の古巣をなつかしく見る目と心が育っています。

子どもたちは、好きな物語を読んだり聞いたりしながら、今いる片隅の意味を味わっているのかもしれません。そこをどんどん掘り下げてゆくのも彼らの仕事でしょうし、そこを起点に空へと飛ぶのも彼らの自由です。でも、あの小さな片隅が自分のエネルギーの源だったと、いつかはっきりと悟ることでしょう。

わたしたちの人生の原像は、幼い日にすでに現れていた。これは決して宿命論ではありません。むしろ、森有正がいうように、非常に深い、慰めにみちた消息ではないかと思います。そうした子どもたちとともに居あわせるわたしたちです。小さな片隅にこだわる子どもたちから、むしろそこになにがあるのかを学ぼうではありませんか。

わたしは、こんなことを考えさせてくれたふくろうに今度もまた、深く感謝しましょう。

（新潟医療短大）

おばあちゃんと出会う

上垣内伸子

「さあ、そろそろ始めるかね。
はい、みなさんこんにちは。
今日の私の話は『かもとりごんべえ』です。これは、
むかしむかしの話だね。
かもとりごんべえ。ぶん、さいごうたけひこ。え、せ
がわやすお

いまの　よに、だれしらぬ
もののない　かもとりごんべえと
いう　おとこは、なにを　かくそう
この　わしのことなのさ。
おもえば、もう　ずいぶんと
まえの　ことだが、わしが
かりゅうどを　している　ころの
ことだった。
わしは　まいにち、かもを

一わ　とっては　まちへ――――(1)

Kさんのよく通る太い声に、さっきから子ども達は身じろぎ一つせず引き込まれている。とある土曜の昼下り、月に一度の『折り紙と絵本の読みきかせの会』が始まった。市立図書館と棟続きの市民センターの和室。常連の子ども達が十四～五人、畳の上に思い思いの格好ですわり込んでいる。どこの町でもよくみかける、図書館主催の読みきかせの会の風景だ。

現在私の住んでいる東京近郊の住宅地あたりでは、こうした会の担い手は、若いお母さん方であることが多い。ところが、このKさんは、そのまたお母さんくらいの年齢、次にお話をするHさんも同じくらい。おばあちゃんの手になる読みきかせの会である。

ここは、東北の南部に位置するK市。東・西・南の三方をなだらかな山々に囲まれ、阿武隅川沿いにひらけた、人口約三万人の小都市である。見渡す限りササニシキの水田が広がり、住民の半数近くが農業に従事する農業地帯だ。東北地方の他の農家と同様に、田仕事の主体はおじいさんとお嫁さん、おばあさんは家事や子守りという図式がこの町でも成り立っているらしく、昼間は買い物姿の年配の女性や小さい子どもの姿をみかけることが多い。市民活動の中心も五十代、六十代の女性であり、この読みきかせの会のメンバーも、ほとんどがおばあちゃんというわけである。

私は、ふとしたきっかけで、昭和五十九年から二年間この町に住み、読みきかせの会の活動にも参加させていただいた。そこで体験した子どもとおばあちゃんの出会いの楽しさを紹介してみたい。

「――――すると　みんなは、大きな　ふろしきを
　下に　ひろげ、さかんに　手を　ふって、
　とびおりろと　あいずする。
　ええ　ままよ、ひとおもいに　おもいきって、
　まっさかさまに　とびおりた。

ごっつん
ぱっ

目から　火がでて、
なにもかも　もえちまった。

のこったのは
わしの　はなしだけ……。
あっ　は　は　は　は。(2)

はい、おしまい。」

大きな笑い声でKさんの話が終わった。

Kさんは、ずっとこの町の小学校の教員をなさっていたそうで、今でも町では「K先生」と皆んなから呼ばれている。大柄で一見男性的な印象だが、とてもユーモアのある方だ。その低くてよく響く声と、ひょうひょうとした語り口で民話を読まれる時、子ども達は一気にその世界に引きこまれていく。いろりの端で年寄りからむかしの話を聞いている――そんな空間がそこに生まれるかのようだ。民話は、よく教科書にも載せられており、ストーリーを知っている子どもも少なくはないが、Kさんによって語られる時、その話は子ども達の心の中に、一層鮮やかなイメージをもたらすのだろう。

続いて登場するのはHさん。Kさんとは対照的な小柄なおばあちゃん。ひかえめな方ではあるが、その穏やかな性格からか人望が厚く、よくいろいろな世話役をたのまれるとか。さて、今日の話は『やまんばのにしき』

「そこで　また、みんな　ひたいを　よせて
そうだんしたが、なにしろ　おそろしい
やまんばが　いると　いう　山だもの、
いった　ものは　たれひとり　おらん。
すると　あかざばんばと　よばれている

七十いくつの　ばあさまが　でてきて、
「それなら　おらが　いっしょに　いって
やるべ、なに　いこうと　おもえば、
みちなんぞ　いくらも　あるもんだ」
そう　いって、あんない　かってでたと。
はなしが　きまったので、ねぎそべと
だだはちは　もちを　かつぎ、あかざばんばが
さきにたって、いよいよ　ちょうふく
やまへ　のぼることに　なった。――――」

聞いているうちに、読み手のHさんと、やまんばの住む『ちょうふくやま』の道案内をかってでた『あかざばんば』とがオーバーラップされてくる。絵本に描かれた『あかざばんば』が、どことなくHさんに似ているように思えてくる。

「なんのなんの、なんでも　ねえと
おもえば、なんでもねえもんだ。
さあさあ、げんきを　だして、
いくべ　いくべ(4)」

会話の部分もまるで普段のままの語り口。もう誰もかなわない。だんだんと、やまんばのところへ行くのは、このHさんではないかという気がしてくる。この話も、知っている子どもの多い話だが、聞き手の子ども達は、どうなることかと、足をモジモジさせながら聞いている。

もちろん、熟練したストーリーテラーは、性別や年齢や、またとり上げる素材に関係なく、聞き手をその物語の世界に引き込んでいくに違いないだろう。しかしながら、『かもとりごんべえ』や『やまんばのにしき』といった日本の民話をKさんやHさんが語る時の、お二人の年齢とか着ている物とか少し東北のなまりのある語り口とかが酵し出す独特の雰囲気――記号としての〝おばあちゃん〟とでもいうのか――も、他の誰もが真似ることのできない得がたいものであり、まさしく民話の世

界の具現化、〝おばあちゃん〟の世界の展開であるように思う。

ここK市における、おばあちゃんの読みきかせの会の成立は、兼業農家の多い農業地帯といろりという生活環境の必然がもたらしたものではあったが、子どもとおばあちゃんというこの組み合わせは、必然ということばだけでは言い尽くせない楽しさを生み出しているようだ。それは、聞き手の子ども達にとっては、学校生活や友だちとの遊びとは異なった〝おばあちゃん〟の世界と出会う楽しさかもしれないし、読み手のおばあちゃんにとっては、子どもとのふれあいによって自らも童心に帰る楽しさかもしれない。

童子論の援用を待つまでもなく、子どもと老人は、とらわれの知らない心の自由さ、体にとり込んでいる時の流れのゆるやかさにおいて共通する存在であり、相互に変身しうる可能性を持った存在であるように思う。読みきかせの会は、絵本（ここでは民話）を接点とした互いの心の世界が出会う端の一つだとは考えられないだろうか。おばあちゃんの心の中にいる〝子ども〟が、絵本をきっかけに飛び出してきて、聞き手である子どもと交流する――そんな楽しさに、この会は支えられているのではないだろうか。

＊

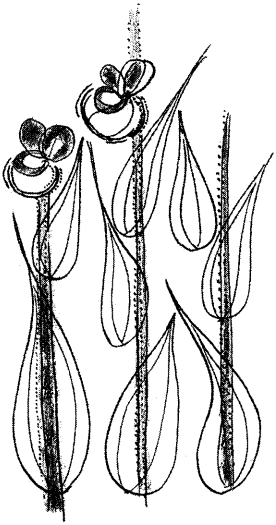
こうしたおばあちゃんの絵本の読みきかせの会の楽しさを経験した後、再び東京へ戻ってきた。現在住んでいるのは近効のベッドタウンである。ふと気がつくと、周りにおばあちゃんがいなくなっている。読みきかせの会はもちろんのこと、様々な市民活動の中にも老人の姿は少ない。都市部に住む核家族にとって、老人と出会うことはむずかしいことなのだろうか。次々と押しよせる仕事に追われ、コマ切れの時を積み重ねていく日々の中で、K市でのおばあちゃんの読みきかせの会のひとときが、かけがえのないものとして思い出されてくる。

単に伝統文化の継承という観点からのみ、〈老人――→

子ども〉という縦のつながりを考えるのではなく、また母（親）に替わる保育者としてだけとらえるのでもなく、子どもとどこか相通じる時空間の伸びやかさを心の中に持った存在として、子どもの育ちのかたわらに、おじいちゃん、おばあちゃんがいて欲しいものである。

〈引用文献〉
(1)・(2) かもとりごんべえ　文・西郷竹彦　絵・瀬川康男
ポプラ社　昭和四十六年
(3)・(4) やまんばのにしき　文・松谷みよ子　絵・瀬川康男
ポプラ社　昭和四十二年
〈参考文献〉
囲碁の民話学　大室幹雄　せりか書房　昭和六十二年

（お茶の水女子大）



ひとりで遊ぶとき、一緒に遊ぶとき

牛山　佐智恵

九月、雨あがりの庭で、三歳のIが機嫌よく砂いじりをしていました。そばには、角柱状に組み立てたブロックが立ててありました。

Iは砂をかき集めると、そのブロックの中へどんどんつめこんでいきました。それから側面のブロックを一つはずしてみました。砂はほどよく湿っていて、側面にあけた口からしぼり出されるように出てきました。

Iはブロックの中に残っている砂をもっと出したいらしく、砂をかき集めては投げこむように中に入れていきました。しかし思うように出ないことに気づいたのか、しばらくすると、先ほどはずした側面のブロックを元どおりにはめて、砂の出口をふさぎました。それからまたどんどん砂を入れていき、十分に砂が入ったことを確かめると、側面のブロックを一つはずして、砂の出口を作ってみることを繰り返しました。

Iの生まれは年少組でも一番最後、友だちの中で遊ぶよりは大人のそばにいることの多い毎日でした。いつもなら私を見つけると大声で呼びとめ、一緒に過ごすことを求めるのですが、このときのIは、通りがかりに足をとめた私をちょっと見ただけで、自分の遊びを続けました。

十一月はじめ、Iが一リットル入りの空の牛乳パックを持って近づいてきました。見るとその側面にはコの字形の切りこみが入っていて、ちょうどドアのように開け閉めできます。

ふたりで連れだって庭に出ると、Iはさっそくその牛乳パックの中に砂を入れ始めました。側面のドアのような口を手で押さえて砂を入れ、それからおもむろにドアをあけてみました。

私はIが二ヶ月前と同じ遊びをしていることに気づきました。ひとりで、さもおもしろそうに繰り返しやっているのも同じでした。その顔には、自分のおもわくどおりに事が運んでいく余裕のようなものも見えました。

そんなIを見て、私は、ひとりで遊べるということと自分を確認していくこととが重なりをもったもののように思いました。砂を入れたという自分の行為を、Iは砂が出てくるという形で確かめ納得しています。自分のやったことが、形を変えてより鮮明に確認できるとき、そこには自分の力が広がり強まっていくようなおもしろみがあるように思えます。

Ｉにとって大勢の子どもたちに囲まれて暮らす毎日は、納得のいかないことの数多い日々でしょう。そんなＩが、いわば自分をたくわえていくようなひとりの時をもっているのを目にして、私はＩがもう友だちの中でも遊んでいけると感じました。そして、友だちを求めたり友だちに応じたりすることができだすときこそ、こうしたひとりの時間がこれまで以上に大事なものになるのだろうと思いました。私には、Ｉの表情にあった余裕のようなものが、この子が自分を支えていく糧となるような気がしました。

牛乳パックでの砂遊びから数日後、Ｉが「やっこさん作ろう」と言ってやってきました。

半月ほど前から、Ｉは時々私に「やっこさん作って」と頼み、いくつも折ってもらっては家に持ち帰っていました。ですからこの日、Ｉが「やっこさん作ろう」と言ったのにはちょっと驚きました。さっそく二枚の折紙を用意して、私が折るとＩが折るというぐあいに、ふたりでやっこさん作りを始めました。

それぞれ一つ目を折りあげたとき、Ｉは「今度は一緒に作ろう」と言います。私はどうやったら一緒に一つのものが折れるのかと一瞬迷いましたが、とりあえず折紙を一枚取りだし、ふたりの間に置きました。

ところが折り始めてみると、なるほど一緒に折ることができます。折紙の中心に向かって、私が一角を折ると向かいの角をＩが折る――ふたりの折った紙先は中心点で触れ合うことになります。

考えてみれば、確かにやっこさんは対称形に折っていく繰り返しでできあがります。Iはふたつの紙先が出会う度に、目を細めました。ちょうどおじぎをしあって挨拶を交わしているようなおかしさに、私はこんな折り紙の楽しみ方もあったのかと驚いていました。

そんなとき、Iがひとり言のように口ずさみました。

「いっしょにつくるの　いいきもち
いっしょにねるのは　いいきもち」

Iの「きもち」は、はずむような調子となって語られました。その口からこぼれるように出た歌に合わせて、私も一緒に歌い、一緒に折っていきました。

「いっしょにつくるの　いいきもち
いっしょにねるのは　いいきもち」

一緒に遊ぶこと、一緒に同じ時を過ごしていることが、互いの心をあたためていくさまを、Iはそっくり歌ったように思います。

「あっ、お帰りだ」と急いで立ち去るIを見送りながら、私はほんとうにIと一緒に遊べたという気持ちになりました。最初はIにつき合うつもりで始めた折り紙でしたが、いつのまにか私も楽しんでいました。そして最後は、Iにすれば思わず口をついて出た歌を思いのほか喜んだ私に、Iの方がつき合ってくれていたのかもしれません。それぞれに相手を求め、相手に応じたことが、つき合うことを越えて一緒の時をつくったのだと思います。

Iが「いっしょ」を「いいきもち」と口ずさんだのも、大人と過ごすときのゆったりした気分を、この子がこのとき、かなりはっきり意識していたからでしょう。それは「一緒に作ろう」と誘いかけ、その言葉どおりに遊べたことから生まれたものだと思います。そこにはやはり、ひとりで遊ぶときのIに見た余裕のようなものが感じられます。ひとりで遊ぶことと一緒に遊ぶこととが、バラバラのものではないことを考えさせられたひとときでした。

（長野幼稚園）

若いお母さんたちへ

この頃…

はるにれの会　向山陽子

昭和五十七年年の秋の終わり、そう、中曽根内閣の誕生と時を同じくして産まれた娘も、四才。幼稚園に、はりきって通うようになりました。

〝子どもは一人〟〝仕事は辞める〟〝子どもができたのだからこうして……といった類の要求はしない〟との夫からの条件をのんで（？）切に望んだ母親となって五年。

冒頭から余談になりますが、五年というの

は、胎内に、わが子を感じてからの年月です。

私は、今でもあの何とも不思議な、体中の全神経が、胎内に集中するような、胎内を保護するような感覚を思いおこすことがあります。又、その感情を思いおこす時、必ず、同時に思いおこすのは、娘が二才近くなって、はじめて私から離れて、他のおかあさんと公園へ遊びにいった時のことです。

この時、私は何ともいえない鈍い痛みを腹部の奥に感じていました。胎内の一部がなくなってしまったような、そう、歯を抜いた後、いつまでも意識が、なくなった歯へ向くような、そんなおちつかない空虚感でした。「これから娘が一人立ちしていくにつれて、何度もこんな空しさを味わうのだろうな」と、その時、思ったものです。

話を戻しましょう。

この五年をふり返ってみると、それまでの夫婦二人だけの生活から、子どもが加わっての三人の生活への変化は、私達夫婦にとって、予想以上に大きいものでした。

夫にとっては、煙草を吸う事にも気を使い、大好きな車の運転にも気を使い、配偶者の私の第一の関心事は夫ではなく、子どもに移ってしまい、当の私はそれは当然のことで、そんなことにイライラしているのは父親として育っていないと決めつけてかかっていたのですから。

そして子を持たないと決めていた夫の子を持っての責任感は、大変なものであったでしょう。

幼い娘との毎日で必死な私は、そんな夫の思いにまで到底思い及びもしませんでした。

又、私にとっても、仕事を辞めた欲求不満は常にあり、このままでは再就職できないのではといつも焦っていて、本当に娘との時間を楽しんだのは、最初の一～二年だけだったのではないでしょうか。次第に、夫の仕事が忙しくなり、夫の世界が、私の全く知らない所へ広がっていき、私への関心が薄くなっていくことへのあせり、自信喪失――私自身の夫への関心が、子どもにとってかわっていることは棚に上げて――。

そんなイライラは、娘との関わりにきっと影響してい

たでしょう。

子を胎内に感じてから五年。

迂余曲折を経て、やっとこの頃、親子三人の生活が根づいてきたなと思えるようになってきました。

あいかわらず、主人は忙しく帰りは深夜、長期出張の多い母子家庭同然の毎日ですが、私自身が心安らかに、昼間の娘との生活を楽しめるようになってきたのです。

何故、今、こんなにも、安らかでいられるのか、娘にも「やさしくて、きれいなおかあさん」と言ってもらえるようになったのか。

この紙面に書かせていただく機会に、ふり返ってみようと思います。

この紙面に書かせていただいたびに、自分にむきあう機会を与えていただきました。他のはるにれの方々は、ご自分と、お子さんのことを書いておられるのに、私だけ、夫との葛藤などを書いて……と自己嫌悪に陥ったこともありました。が、私の場合、娘とのことを考える時、私と夫との葛藤ぬきでは、語れなかったようです。

そして、私の他にも、子育て中の方で、ご自分とご主人との事、又、ご主人とお子さんの事で、悩んでる方が、なんとたくさんいらっしゃることか。

しかし考えてみると当り前のことで、夫婦がいて、子がいて、それにつながるさまざまな人間関係で、世の中が成り立っているのですものね。

娘であった一女性が、妻になり、母親になっていくにつれ、悩みも、考えることも変化していくのですものね。

仕事を辞めて地域に浸って三年。

私は地域の子育て仲間に恵まれました。

いい方ばかりです。でも、どの方も、何かしら〝不安〟を抱いていました。ご主人のこと、お子さんとのこと、お姑さんとのこと、年老われた親ごさんをめぐってのこと——他に発散する場所のない私達は、子どもを遊

ばせるために集まった公園で、ブツブツと愚痴をこぼしはじめていました。

最初は、深いところまで話せる仲ではありませんでしたが、どの家族も子どもが増え、子どもが成長するにつれ、又、ご主人の仕事が忙しくなってくるにつれ、母親であり、妻である私達は、いろいろ悩み、家の中のことまで話し、相談するようになっていました。

幸い、私達は、住環境は、社宅でもなく同じマンションでもなく、一戸建てあり、間借りあり、マンションあり……又、それぞれの家が、近くて四〜五軒先、遠いお宅は、大きな道路を隔てた先にあったりで、公園を中心に集まり、子ども達を思う存分に遊ばせることが目的の母親が集まっていました。

ですから、それぞれの生活を侵害しない程度に、距離を保つことができました。私達自身の悩みを口にすることで、発散も出来、又、言葉にすることで、自分自身の思いを整理することにもなり、聞く側にとっても、大なり小なりいずれは、自分の家族の問題にもなり得ることばかりなので、親身になって聞いてもらえました。

私は、この、地域の子育て仲間に、ずいぶん、救われました。

人の話を聞いたり、人の子どもへの接し方を見ることで、自分自身に気づき、反省することも多く、妻として母親として成長させてもらいました。

特に、子どもとの接し方については、皆が子どもの側に立って、気づいたことを暖かく忠告してくれるのです。

母親が子どもの全てを知っているわけではありません。

子どもも三才、四才になってくると、母親のいないところで、例えばおともだちの家で、母親の知らない面をちらっと、見せたりするものです。

子どもは大好きなおかあさんに愛されたいので、おかあさんの期待にこたえようとします。けなげにも……。

母親の知っている我が子の姿はある一面にすぎないことが多いものです。

ですから、母親のいない時、暖かく見守ってくれる人が他にいることは、そして、子どもの立場に立って、母親に忠告してくれる人が地域にもいることは、本当にありがたいのです。

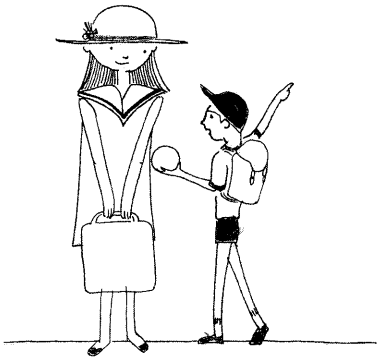
私達は「自分のことは見えないが、人のことならよくわかる」といって、自分のことは棚に上げさせてもらって、互いに、母親としての成長を促しあってこれました。

例えば　私の場合、

何号か前に書いたものと重なるのですが、娘の入園前の冬、私は一日三時間の非常勤の仕事に出ていました。往復の時間を入れ約五時間、娘を地域の仲間に託して……。

子育て仲間達は、私自身の再就職への焦りも知っていましたから、「いってらっしゃい。Mちゃんは、今までどおり遊んでいましょう」と言ってくれました。

順調に、娘もそんな生活を楽しんでいるようにもみえましたが、三カ月すぎた頃から、帰ってみると、娘は、



他のおかあさんに抱っこされている日が多くなり、私がいない間の娘の様子を報告してくれる中に〝がんばっているわよ〟〝がまんしているわよ〟が多くなり、ある時「誰かのおかあさんに、ぴったりくっついてお友達とは遊べなくなってきているわよ」と忠告を受けました。

その様子はうすうす感じてはいたものの、私と娘との会話の中では、「明日は○○のおうちがいい。おかあさんはお仕事いっていいよ」と言っていた娘でしたから、母親にとっていい子になろうとしている娘の心を思うと涙の出る思いでした。

仕事はとてもやりがいがあり、職場の方々も素敵な方ばかりで、私だけにとってみれば、やり続けたい仕事ではありました。

四月以降、産休代替の常勤にもつきましたので、娘以上に私も楽しみにしているH幼稚園を諦めてでも、続けようかと迷いもしましたが、母親にとっていい子になろうとしている娘の心を知らされて、娘が楽しみにしているH幼稚園まで、私の勝手でとり上げてはいけない、と、三月まで勤めさせていただき、四月以降の常勤は、若い方にひきつぐことにいたしました。

この四ヶ月の経験は、母親としても、いつかは又子ども達のいる現場での職に就きたい私としても、貴重な経験でした。

この四ヶ月を支えてくれ、日々の迷いを一緒に語りあってくれた地域の子育て仲間には、本当に感謝しています。

「お仕事しているおかあさんの方が優しいな」とまで娘に言わせた、四ヶ月前の私にあった再就職への焦りも、なくなりました。

焦っているばかりでなく、今、何をして再就職への準備をすればいいのかが、具体的に見えてきたからでしょう。

その一つは、望んだH幼稚園へ、娘とともに通い、娘の成長をこの目で見、母親としての自分の成長を体験していくことでしょう。

又、一つは、地域の児童館での三才児の保育のお手伝いと、おもちゃの部屋の活動を、仲間と共に続けていくことでしょう。

この二つは私に栄養とエネルギーを与えてくれるに違いありません。

そして、又十年間の家庭生活の整理整頓です。共嫁ぎ、子育てで積もりに積もった家の中の、物質面、精神面の〝お荷物〟を、シンプルにしないことには、来る四十才代、五十才代を勤めを持ちながらは、のり越えられないでしょうから。

地域の子育て仲間のお子さん達も、娘と同年齢のお友達は、四つの幼稚園、保育園へそれぞれ入園しました。

そして今日も、園から帰って休んだ後、いつもの公園で、いつものように、水で、砂で、すべり台で、ブランコで、いくつかのグループにわかれたり、くっついたり、追いかけたり、キャーキャーいいながら、十人ほどで遊んでいます。回りのベンチでは、ヨチヨチ歩きの下のお子さんを見守りながら、いつものように、子育て談議がはじまっています。

この子育て仲間にも、一部の方々が近づきすぎて、息苦しくなり、うまくいかなくなったこともありました。

幼稚園、保育園を選ぶ段階で、今までの子育てに自信がなくなってしまった方もありました。

私のように、急に、娘を預け、勤めに出てしまう者もありました。

どんな時も、子ども達はいつもと変わらず遊び続けられるようにと、力を出しあい、場所を提供しあい、支えあってこれました。

引越していった方達も、人形劇や、遠足の予定を組むと、必ず姿を見せてくれます。

これからも幼稚園、保育園は別でも、私達母親が誰かに話したくなった時、相談したい事ができた時、この小さな公園に集まって来れるようにしたいと思います。

子育て仲間の下のお子さん達が今まさに、泥ンコ時

代。公園へいけば、きっと誰かがいます。
それぞれの園のことも、距離を保てるこの仲間となら、又幼い頃共に遊ばせたこの仲間となら話せそうです。

そういえば娘がヨチヨチ歩きの頃、このあたりはまだまだ大きな木がたくさん残っていました。
今、どんどん、大きな木は切り倒され、キャベツ畑もなくなり、宅地へ、テニスコートへ、駐車場へとかわっていきます。
昨日も、砂遊びをしていた公園の隣りで、ブルドーザーが、大きな欅をなぎ倒していました。
「かわいそうだね、木さん。お水のめなくなっちゃうね。」
「いたそうだね」
「せっかく大きくなったのにね」
「どこへいっちゃうんだろうね」
「やきいもできなくなるね」

四才の娘達の会話です。
きっと私達には手の届かない値段の家が建つのでしょう。
今、娘達が児童館へいくためには、環状道路を横断しなくてはなりません。いつも車が渋滞していて、娘達が渡る横断歩道の上に大きなダンプカーが停まったきりで、信号さえ、見えない状態は、しょっ中です。
娘が産まれた時、ここは雑木林でした。
そう、その児童館でも、今年度から区が障害児関係から手を引き、職員が二人減りました。
仲間と続けようとしている「おもちゃの部屋」は転勤していった職員が〝障害児と健康児が共に遊べる場所に〟と、はじめた活動です。私たちは彼らの「細々とでも続けて、区にこういう活動が、地域では必要なことを訴えていきたい」との熱い思いをうけつごうとしています。
こうしてこのわずか五年の地域の変化を見ただけでも、私達母親は、しっかりと地域に根ざして生活し、子

ども達を家族を守らなければ……と思えてきます。
再就職への私の焦りも、これらの変化と無関係ではなかったようです。

私の今の安らかな状態は、娘達の入園をきっかけに、母親として、妻として、地域住人としての自分をはっきりと意識して、成長していけそうな予感がするからでしょうか。

先日、ドイツから一時帰国されている、H幼稚園の園長先生は〝人の目をおそれることなく、天をおそれよ。濁流の中に身をおこうとも、心の中に一筋の清流をもつ人間になれ〟と、話してくださいました。

胎内に我が子を感じてから五年、
親子三人で安らかに互いの成長を喜びあって生活していけそうです。
妻であり、母親である私の心が、こんなにも晴れやかなのですから。

――お知らせ――

二十六回の長きにわたり「幼児の教育」に連載された「近代短歌に現われた子ども」が、この度「短歌の中の子ども」とタイトルを変え、一冊の本にまとめられました。お茶の水女子大学の教授をつとめられた大塚雅彦先生の作品で、連載時より、多くの読者に深く愛されたものです。

日本の激動期ともいえる明治、大正、昭和。その様々な社会状況の中に生きる人々の心情を、子どもを通し短歌に著わした歌人たち。親と子の結びつきを鮮明に短かい言葉の中に集約しています。大塚先生の作品は、単なる短歌の解説ではなく、長年、東京家裁首席調査官をなさった先生の眼を通し、より人間臭い、そしてより切迫したものになっているようです。

桜楓社　一九〇〇円

日曜日のデパートは、家族連れであふれている。なんでよりによって、日曜日に買い物に来るのかと、人ごとながら思ってしまう。都心のデパートは、その多くが夜7時まで営業しているのに…。

何故かお母さんは、わざわざ日曜日に仕事で疲れ切ってヨタヨタになっているお父さんを引っぱり出して、デパートに来る。これが家庭サービスなのだろうか。多くのお父さんは、そのお母さんの買物に対するパワーに押され、階段のすみや売り場のわずかな空間に、身を寄せている。その顔は、怒りを通り越して、あきらめの表情すら浮かんでいる。

お母さんは、子供をお父さんにあずけて、目的の商品へと突進する。子守り担当のお父さんのいないお母さんは、子供の手を引いたり、声をかけながら、人ごみをぬってゆく。

「早く来なさい。どこウロウロしてるの。しっかり歩くのよ」

と、激励しながら、前へ前へと進んでゆく。子供は、お母さんを見失なわないように必死に歩くが、なかなか前に進めない。歩いても歩いても、目の前には、巨大なおしりが立ちふさがり、ゆく手をさえぎる。早く前へ進もうと思って、ちょっと前のおばさんのおしりを押すと、頭の上の方に大きな頭が現われて、ギロッとにらみつけられてしまう。

日曜日のデパートは、子供にとって、巨大なおしりばかりある所ではないかと思う。エレベーターに乗れば、無理やり奥に押し込まれ、よそのおばさんのおしりが目の前に迫ってくる。時々、いやなのに、おばさんのおしりに顔までくっつけなくっちゃならない。見えるのは、わずかに頭の上の空間だけ。

日曜日のデパートでは、子供をせっつくお母さんと、わけもわからずおしりの間を走りぬける子供と、疲れ切ったお父さんがいたるところにみえてくる。

幼児の教育　第八十六巻　第七号
七月号　©
定価　四〇〇円
昭和六十二年六月二十五日　印刷
昭和六十二年七月　一　日　発行
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
編集兼発行人　本田和子
東京都文京区大塚二ノ一ノ一
お茶の水女子大学附属幼稚園内
発行所　日本幼稚園協会
東京都港区三田五ノ一二ノ一
印刷所　図書印刷株式会社
東京都千代田区神田小川町三ノ一
発売所　株式会社　フレーベル館
振替口座東京九一九六四〇番
⊙本誌御購読についての御注文は発売所フレーベル館にお願いいたします

※万一製造不良の点がございましたら，おとりかえいたします。

保育カリキュラム資料〈全6巻〉

（春・夏・秋・冬・遊び・小事典）

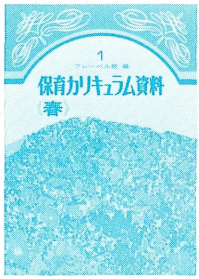
別冊付録付・総索引付

カリキュラム作成のとき役立ちます。
既製のカリキュラムでは、あきたらないと考えているあなたに好適です。
本当の子どものためのカリキュラムとは、あなた自身がつくったものです。小事典には別冊、「総索引」が付録されています。

フレーベル館・編

B 5 判・136頁・定価800円
5・遊びのみ 定価1,200円

1 春



4月の保育・5月の保育・初めての園生活

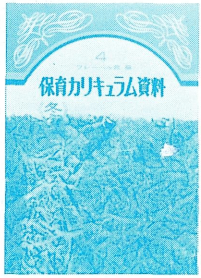
2 夏

6月の保育・7月の保育・8月の保育・夏休み

3 秋

9月の保育・10月の保育・11月の保育・運動会

4 冬



12月の保育・1月の保育・2月の保育・3月の保育・進学の準備

5 遊び

あぶくたったにえたった・石けり・うずまき鬼・絵かき歌遊び・大きなクリの木の下で・開戦ドン・他

6 小事典

付録・別冊「総索引」

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館

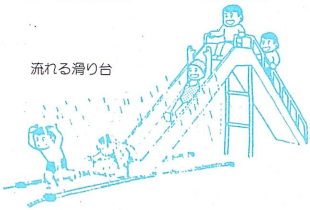
とーりゃんせ

緑の中にひろがる“水のアスレチック”

定価　33,000円　　8m×2本　特殊軟質塩化ビニール製

水の土俵で
おしくらまんじゅう

噴水ブランコ



流れる滑り台

ホースのスリットから霧状に水をふき上げるので、あたりがソフトで、園児が水に慣れる、水に親しむのに最適な水遊び用品です。
取付設置が簡単なので、自由な使い方ができます。

○軟質のパイプで、ジョイント部分もゴム製なので、安全な散水装置です。
○取扱いが非常に簡単なので、女性の方でも設置できて収納も簡単です。
○配管やノズルなど一切必要としません。それに噴霧状扇形に散水できます。
○ゴミや異物などによる目づまりがありません。

くわしくはフレーベル館代理店・特約店・支社・支店・営業所または本社営業部(03)292-7783(代)にお問い合わせください。

子どもの心と明日を考える
キンダーブックの
フレーベル館